村山民俗学会

第394号
発行日　2024年8月1日
発行責任者　相原　一士
編集担当　岩鼻通明

「ふるさと今を絆ぐ道：栗子山隧道」

奥山 美由紀

初夏らしい空の下、遠く離れて住むオランダと生まれ故郷をわずかながらも絆ぐ歴史の場所、「栗子山隧道」をついに訪れた。ひとりのオランダ人も引き連れて。

「土木県令」の三島通庸が建設させた、864m と当時は日本最長のトンネル。米国製の新型の掘削機も使い、馬車がすれ違える 7m を超える幅になった。明治 9 年から開削を始め 13 年に貫通、ついに翌年 10 月 3 日に東北行幸中の明治天皇を迎えての開通式が行われた。天皇が命名した「萬世大路」は米沢と福島をつないだ。この隧道建設を担ったのがオランダからのお雇い外国人、G.A.エッシャーだ（その息子 M.エッシャーは騙し絵のような手法で国際的に有名な芸術家であり、私の住むアーネム市には彼が学びインスピレーションにもなった学校も残っている）。

米沢と福島を結ぶ隧道へは、13 号線を外れて採石場まで進み、そこから約 4km の山道を登ることになる。いくつもの急な「むずり」や当時の石積や橋を通り、鶯の声を聞き、ツツジの花に癒やされながら隧道を目指した。ついに目の前に平らな場所が開けると、まずは昭和 12～40 年まで使われたトンネル、それから約 10m ほど右にエッシャーによる隧道が現れた。建設から 140 年以上が経った隧道はまるで天然の洞窟のようで、何も見えないほど中は真っ暗だ。それを眺めていると、当時この中を通るのに提灯などを使ったのだろうか、人々や馬が行き交い運んだのは何だったのだろう、初めて隧道を通った人々の気持ちは、などの考えが次々と頭に浮かんだ。隧道の闇を覗き込んでいると、明治の人々や三島、エッシャーの足音が闇の中からかすかに聞こえてくるような気がした。

絵と写真：

1）高橋由一による栗子山隧道、「文化遺産オンライン」より
https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/410454

2）隧道、2024 年 6 月 16 日、写真：奥山美由紀

3）完成した隧道。右から４人目がエッシャー、その２名左が三島。（「写真の中の明治・大正」より）
https://www.ndl.go.jp/scenery/column/tohoku/kurikoyama_tunnel.html

奥山美由紀氏（東根市生まれ、オランダ在住）は、野口一雄氏の元教え子。芸術写真とドキュメンタリー写真のほか、メディア記事なども手掛ける。www.miyukiokuyama.com